四四五　熱甚し。坐して書を読む。余、其の甚だ堪え難きを知る。

比日熱甚、坐而讀書、余知其甚難堪也。

四四六　然り而して熱に苦しみ寒にえ、課業を怠る。常ならず、歳を送る。の頃、既に過ぎ、且つ及ぶ。而して此の生に何の為す所にして以つて世に立たんとするや。

然而苦熱怯寒、屡怠課業、作輟不常、因循送歳、倏忽之頃、少壯既過、老大且及、而此生將何所爲而以立於世哉。

四四七　学ぶ者は固く此の志をり、寒の為にえず熱の為にまれず、、、必ず得る所あるを以つて期と為す。

學者固執此志、不爲寒怯、不爲熱沮、埋頭研鑽、孳孳矻々、必以有所得爲期。

四四八　得る所深く且つ厚ければ、則ち異日以つて天下に名あるべし。浅ければ則ち僅かに以つてにわるに足る。而れども、、をこれみ、遊戯雑作して、を誤り人を誤るものは、た其の死して聞こゆるなく、朽ちてと為るを怪しむなきのみ。

所得深且厚、則異日可以名於天下、稍淺則僅足以見於郷閭、而庸惰昏憒、晝間夜裏、惟閑之偸遊戯雜作、誤己誤人者、莫復怪其死而無聞、朽爲糞土而已。

四四九　是れ故に志あるの士は、らざるべからず。めざるべからず。苦しまざるべからず。苦をいてめざるものは、極めて其の志なきを見る。　七月十七日、書して以つて諸生に示す。

是故有志之士、不可不慮、不可不力、不可不苦、厭苦而不力者、極見其無志矣。　七月十七日、書以示諸生。

四五〇　のは上を食い、下を飲む。、きて在らざる所なし。

夫蚓者上食槁壌、下飮黄泉、黄泉槁壌、無所往而不在也。

四五一　そ生を天地の間にくるものは、資用の急、飲食より急なるはなし。而して飲食の富、より富めるはなし。則ちの生を為す、、又宜しくの生より楽しきはなかるべし。

凡稟生於天地間者、資用之急、莫急於飲食、而飲食之富、莫富於蚓、則蚓爲生、從容遊樂、又宜莫樂於蚓之生也。

四五二　然れども時に盛夏炎暑ののごときあれば、則ち、た土中に居る能わず。、、以つて死命の免れ難きに至る。し亦かくのごときものあり。

然而時有盛夏炎暑如炙、則蚓不能復居土中、流離顛連、悶悩困憊、以至於死命之難免、蓋亦有如此者。

四五三　今れ人は得るを憂い失うを憂う。務めてのを為し、又子孫の計を為すものは、として多く資材を積むに過ぎざるのみ。而れどもの至るは、だ必ずしもにあらずんばあらず。而してののう所に類するもの、より亦多し。

今夫人之憂得憂失、務爲己謀、又為子孫計者、不過汲々多積資材而已、而禍患之至、未必不在此、而類夫蚓之所遇者、固亦多矣。

四五四　是の故に人の、世に処するに、ら其の身を保ち、天と人とに応じるゆえんのものは、内は則ち其の徳を慎まざるべからず。外は則ち其の道を尽くさざるべからず。其の富をみてをにすべからざるなり。　丑七月廿五日、録して書生に示す。

是故人之處世、所以自保其身、而應於天與人者、内則不可不愼其徳也、外則不可不盡其道也、不可徒恃其富、而惚於菑也。　丑七月廿五日、録示書生。

四五五　そ小文を作るには、も其の曲折多きをび、其の転換多きをぶ。然らざれば則ち意味たるを免れず。

凡作小文、尤尚其多曲折、尚其多轉換、不然則不免意味索然也。

四五六　これを小屋を作るにえれば、屋、小なりといえども、必ず区画するに方あり、其の接賓の処あるを要し、其の読書の処あるを要し、其の、雑事を治める処あるを要す。然らざれば則ち家たるを成さず。

又これをの地をすにえれば、細泉を引き、小石を運び、、経営してを作る。くも能く其の巧を施せば、則ちの間といえども、として湖山千里の趣あり。

譬之作小屋、屋雖小、必區畫有方、要其有接賓處、要其有讀書處、要其有庖爨治襍事處、不然則不成爲家。

又譬之就掌大之地、引細泉、運小石、矮樹雜卉、經営作苑池、苟能施其巧、則雖咫尺間、而居然有湖山千里之趣。

四五七　作者は小文に於いても、へて軽易に筆を下さず。必ず心力を尽くし、極めて商量を費やす。是の故に文成りて千古に伝えるに足る。韓文公の「」・「雑説」・「・を送る諸序」及びの「永州諸遊記」等のごとき、皆是れなり。　丑八月初七日、録して諸生に示す。

作者於小文、不敢軽易下筆、必盡心力、極費商量、是故文成而足傳千古、如韓文公穫麟解・雜説・送董邵南・廖道士、諸序、及柳子厚永州諸遊記等、皆是也。　丑八月初七日、録示諸生。

四五八　韓文公の「雑説上下」二篇、上篇はに雲龍を以つて名づくべし。下篇はに駿馬を以つて名づくべし。然れども此の二篇はちて、分析すべからず。因つてて「雑説」を以つて篇に名づくるなり。

韓文公雜説上下二篇、上篇本當以雲龍名、下篇當以駿馬名、然此二篇主意相須、不可分析、因汎以雜説名篇也。

四五九　上篇は雲と龍と転換し、更に其の霊を説き、にこれを結ぶ。つて「既に龍とえば則ち雲これに従う」とう。專ら雲なくんば以つて龍と為るに足らざるを言うなり。得を龍に責めること重し。下篇は入手より、馬ありてられざるの意を説き、反覆感慨、末に至りて馬なきかと馬をらざるかと両般説き下し、えてら断ぜず。而して不平の気、として言外にる。

上篇雲與龍轉換、更説其靈、終而結之、却曰既曰龍則雲從之、專言無雲之不足以爲龍也、責得於龍重矣、下篇從入手、直説有馬而不見識之意反覆感慨、至末無馬與不識馬兩般説下、不敢自斷、而憤鬱不平之氣、勃々溢於言外。

四六〇　雲と龍と併説するも、龍を以つて主と為す。伯楽と名馬を併説するも馬を以つて主と為す。馬は則ちこれを臣にし、龍は則ちこれを君にす。れるも、いわゆるちて、分析すべからざるは、此れを以つてなり。

雲龍併説、而以龍爲主、伯樂名馬併説、而以馬爲主、馬則比之於臣、龍則比之於君、君臣相形、所謂相須、而不可分析者、以此也。

四六一　文はより意をするも、に作者のみにあらず。に其の大手筆を以つて、神を小処にらし、字字しく、句句巧みに、物を状すること真にり、活発らんと欲す。　丑八月旬有七日、録して書生に示す。此「雑説」を講ず。

文固寓意、非徒作者、且以其大手筆、凝神於小處、字々精、句々巧、狀物逼眞、活發欲躍。　丑八月旬有七日、録示書生、此晨講雜説。

四六二　学者は、しくら信ずる所のものあるべし。

　學者、宜有所自信者矣。

四六三　も、卦をきてより以来、歴代の聖賢、るる所の千言万語は、此の心の理を説くにあらざるものなきなり。

抑自伏羲畫卦以來、歴代聖賢、所垂千言萬語、惟莫非説此心之理者也。

四六四　其の書を読み、其の言を味わい、黙黙として体究し、これをに求めれば、則ち豈にとしてら省発せざることあらんや。

讀其書、味其言、黙々體究、求之於己、則豈有不於恍然自省發者乎。

四六五　省発する所のもの深ければ、則ち亦以つてら信ずべし。是れより以往、をし物に応じるに、皆定見ありてかう所に惑わず。

所省發者深、則亦可以自信、自是以往、持己應物、皆有定見、不惑所嚮。

四六六　流品に於いてかく、功業に於いてか立ち、天下後世の公論に於いてか明らかなり。其れ然り而して後、始めて以つて士と称して恥じざるに足る。　丑八月十七日、録して書生に示す。

流品於是乎完、功業於是乎立、天下後世之公論於是乎明、其然而後、始足以稱士而不恥矣。　丑八月十七日、録示書生。

四六七　余、昔、京に在り、跡をに託す。甚だうべし。然れども夜に入り深きに及びてや、四隣、漸くにして月、天にすれば、則ち屋後の小松の樹影、に移り、微風に動きれ、たり。予、してこれをるに、も身は深山の間にあるがごとし。

余昔在京、託跡市井、喧囂塵埃可甚厭、然及入夜深更也、四隣寂寥、漸而月中天、則屋後小松樹影、移紙窻、微風動搖、鬖々然、予臥而觀之、宛乎身猶在深山空谷之間。

四六八　前庭に又一老梅あり。改春花開くごとに、手もて其の枝を折り、これをにし、にりてこれをべば、幽趣自然にして、意甚だえり。

前庭又有一老梅、毎改春花開、手折其枝、挿之瓶裏、憑几玩之、幽趣自然、而意甚適。

四六九　てにり、人忙しく我たり。因つてら一詩を賦して曰く、西舎は旧債を追い、東家は松竹新年をう、年り年去り吾何ぞからん、に対す清香の煙。

嘗方歳除、人忙我閒、因自賦一詩曰、西舎牙籌追舊債、東家松竹迓新年、年來年去吾何與、閑對清香一縷煙。

四七〇　余、少壮より、に脱俗の想あり。物に触れすること、毎毎かくのごとし。

余自少壯、夙有脱俗之想、觸物興懐、毎々如此。

四七一　既にして山陰にり、地をにし、を結びて以つてむ。溪山、風向清秀にして、深くにう。にえず。歳月、両霜を帯びるも、学は進を加えず、初心にす。此れをみと為すのみ、　丑九月初七日、録して書生に示す。

既而還山陰、卜地青谿、結茅舎以棲焉、溪山明媚、風向清秀、深愜素願、不勝慶快、惟歳月侵尋、兩鬢帶霜、學不加進、辜負初心、此爲憾耳、　丑九月初七日、録示書生。

四七二　余、、諸生の為に、の著わす所の「」なるものを講ず。

余頃爲諸生、講明儒劉蕺山所著人譜者。

四七三　、つて平生の学ぶ所をり、諸経の要をり、周子の「大極」につて、「人極」を作る。因つて此の書を著わし、以つて入道の工夫を示す。

蕺山劉子、嘗括平生之所學、撮諸經之要、倣周子大極圖説、作人極圖説、因著此書、以示入道之工夫。

四七四　此の書、たる一小冊といえども、、本末内外一以つてこれを貫く。而して、説き得て微に入る。先生の人となるの心は、これを至れりと為す。

此書也雖寥々一小冊、而綱擧目張、本末内外、一以貫之、而自訟愼獨、説得入微、先生爲人之心、惟之爲至。

四七五　学ぶ者くも熟読して、得るあれば、則ちた多くは書を読まずといえども、以つて先聖の旨を覚りて、ららざることなかるべし。

學者苟熟讀、而有得焉、則雖不復多讀書、而可以覺乎先聖之旨、而無不自慊矣。

四七六　三百年、輩出し、学術異動多し。最後に世に出で、して、も其のを得たり。而しての著、是れ又其のもなるものにして是れ余の平日敬服してするゆえんのものなり。　丑九月十七日、録して諸生に示す。

有明三百年、賢儒輩出、學術多異動、最後劉子出世、斟酌調停、尤得其悴、而劉子之著、是又其尤悴者、是余之所以平日敬服而信嚮者也。　丑九月十七日、録示諸生。

四七七　末の隠士、ての詩ありて云う、「にをき、貴人をして知らしむるなかれ」と。余に此の句を誦し、深く其の幽趣を愛してまず。

宋末隠士眞山民、嘗有田家詩云、地罏煨芋栗、莫遣貴人知、余毎誦此句、深愛其幽趣不已。

四七八　今れ王公の、平生ける所のの味、の美、、備わらざる所なし。何の山間の食を羨む所ぞ。而るにの徒、た其のを秘し、貴人のこれを知らざるをう。真に一笑を発すべし。

今夫王公大人、平生所享之膏梁味、膾炙之美、珍羞盛饌、莫所不備、何所羨乎山間樵夫之食、而樵夫之徒、還秘其旨、幸貴人之不知之也、眞可發一笑。

四七九　然りといえども王公貴人は、則ちに飲食し、度を過ぐ。いわゆる「五味は人の口をしてならしむる」ものなり。何ぞ以つて天下の味を言うに足らん。而るに山人野僧、閑に投じて招き、を渡りを叩き、、、のをし、のを供し、古今を談じ、詩文を評し、以つて一時のをる。其の軽快妙趣、別に一箇の天地あり。而るによりのの子弟輩の能く夢想する所にあらざるなり。

雖然、王公貴人、則毎飲食流連、酔飽過度、所謂五味令人口爽者、何足以言天下之味、而山人野僧、投閑相招、渡溪橋、叩芝扉、地罏松火、澗實園蔬、喫天眞之雅味、供村酒之下物、談古今、評詩文、以遣一時之興、其軽快妙趣、別有一箇之天地、而固非夫貪昧富貴躁熱子弟輩之所能夢想也。

四八〇　然らば則ちの此の句、独り余これを愛してまざるのみならず、天下又ら会心の人あらん。　丑九月廿七日、録して書生に示す。

然則山民此句、獨余愛之不已、而天下又自有會心之人矣。　丑九月廿七日、録示書生。

四八一　天地四方これを宇とう。往古来今、これを宙とう。

天地四方、謂之宇、往古來今、謂之宙。

四八二　宇宙の間、此の一理あるのみ。此の理の、更に何事かあらん。

宇宙之間、惟有此一理而已、此理之外、更有何事。

四八三　天、此の理ありて、而る後運行あり。地の理ありて、而る後発生窮まらず。風雨霜雪、此の理ありて、而る後順序わず。其れ然り而して後、造化の功成る。

天有此理、而後運行有常、地有此理、而後發生不窮、風雨霜雪、有此理、而後順序不差、其然而後造化之功成矣。

四八四　人は、気を天地の間に受く。に此の形を有し、又此の心を具して以つて生ず。而らば心の理、亦同じからざることあるなく、一ならざることあるなきなり。

人受氣乎天地之間、已有此形、又具此心以生、而心之理、亦莫有不同也、莫有不一也。

四八五　心の理、くも内に明らかなれば、則ち喜怒哀楽、其の節を得て、身修まり家う。推して外に施せば、則ち刑賞、皆其の当を失わず。而して国と天下と、以つてめ以つてらし、億兆の衆、協且つ和ならざるはなきなり。

心之理、苟明於内、則喜怒哀樂、各得其節、而身修家齊、推而施於外、則刑賞黜陟、皆不失其當、而國與天下、以勸以懲、億兆之衆、莫不協且和也。

四八六　聖人の明、にを見るあり。因つて專ら力をに用う。四書六経の学、是れによりて以つて興る。吾人のに信従すべき所のものなり。　丑十月初七日、録して書生に示す。

聖人之明、有夙見乎此、因專用力於此、四書六經之學、由是以興、吾人之所當信從者也。　丑十月初七日、録示書生。

四八七　「萬古の興亡をするの手、千重の雲水に出入するの身」。の此の句、予、に喜びてこれを誦す。

卷舒萬古之興亡手、出入千重之雲水身、康節此句、予毎喜誦之。

四八八　れ千重雲水のに入り、其のを愛して、世間の、、を以つて、ち其の心に入れざれば、其の人、至清且つ至高とうべし。

夫入千重雲水之裏、愛其幽隧、而不以世間富貴榮耀、鄙俗塵土、曾入於其心、其人可謂至清且至高矣。

四八九　れ至清なれば、則ち、内に明らかに。至高なれば、則ち、外にまず、其のかくのごとし。此れを以つて千古をすれば、則ちらかなること火をるがごとく、此れを以つて当世の事をれば、則ちきことを指すがごとし。

夫至清、則神識明於内、至高則情累不撓於外、其襟度如此、以此商榷千古、則瞭如觀火、以此執當世之事、則易猶指掌。

四九〇　然り而して其の清高なるを以つての故に、亦えて手を犯して事をさず、世外に超然として、花月に遊戯し、悠悠として以つて一生を送るは、真の風流の人豪なり。　丑十月廿七日、録して書生に示す。

然而以其清高故、亦不敢犯手作事、超然世外、遊戯花月、悠々以送一生、眞風流人豪矣。　丑十月廿七日、録示書生。

補遺

六十余年養う所、其の志、鉄のごとく、其の気、虹のごとし。これを洩らしてはと為り、これを発しては事業と為る。然り、発すると洩らすと、其の時を得ざれば則ち不可なり。く其の精をびて、これを文字に託し、以つて不朽のと為さんものなり。今日以往、其れ專ら事に従う所あらん。　明治十年十一月二十二日、感ずる所あり、ちこれを録す。

（注）原文で「我其有所專從事矣」の箇所、書き下し文では「我」がない。

原文「明治十年十一月二十二日夜」の箇所で、書き下し文では「夜」がない。

六十餘年所養、其志如鐡、其氣如虹、洩之爲雲烟、發之爲事業、然發與洩、不得其時則不可、姑擇其精、託之文字、以爲不朽之圖者、今日以往、我其有所專從事矣。　明治十年十一月二十二日夜、有所感明旦乃録之。